

心理療法過程における母子関係の変化 (2)

—— 学童期の事例 ——

田 畑 洋 子

The Improvement of Mother-Child Relationship through Psychotherapeutic Process (2)

—— Cases of School Age ——

Hiroko TABATA

は じ め に

クライアントの問題行動や症状は、種々の条件が重なり合ったり、ある出来事がきっかけになったりして出現してくるのであるが、心理療法の開始により、それまでの生育史の中で歪められたり、欠落していた部分が顕わになってくる。その修復が心理療法でなされるべき仕事である。特に母子関係は人間関係の基礎になる部分であるだけに、どのクライアントにおいても話題になってくる。心理療法の過程で母子関係の調整や修復がどのように行われていくか、それがクライアントの成長にどのように関わってくるかについて考察することを目的とする。

前稿では幼児期の事例2例を取り上げ、乳児期の母子関係としつけの問題について考察を加えた。本稿では学童期前半の男児、後半の女児の2例を取り上げる。母子関係の力動性が明らかになることにより、学童期およびそれに続く思春期・青年期の心理的問題の予防に関しても示唆が得られるであろう。

方 法

筆者が担当した事例について、面接記録をもとに経過をまとめる。面接は週一回、50~60分、遊戯療法である。なお、現実面における情報は母親からの報告によっている。

結 果

事例1 H夫 小3男児

1) 主訴；チック

2) 家族；父-34歳，母-34歳，共に自営業。H夫-8歳。妹-5歳。

3) 生育歴及び症状の経過；出産時の異常なし。始歩は11ヶ月。発達上の問題はみられない。乳幼児期は世話のかからない、自慢するぐらいの子どもだった。産休明けから保育園に入れた。3歳時に妹が誕生し、その頃保育園をかわった。チックが始まる。目をぱちぱちさせたので眼科に連れて行くと“逆まつげかもしれない”といわれた。入学する頃から本格的に気になり出したが、家で悩んでいた。小3の3月、鼻をびくびくさせていたので某診療所を受診する。一度おさまったが、声を出すのが激しくなり、再度受診し、当相談室を紹介される。

4) 診断仮説；本来的に神経質で内に閉もるタイプだったのに加え、保育園での長時間保育、特に給食が食べられないで無理強いされたことや、両親間の不和にさらされて、自分を表現し

ていく自信をなくしてしまっている。また小3になってからは誘いにくる友達もいなくなり、家でマンガをかいたり、イヤホーンで音楽を聞く生活になっている。母親との結びつきは強いが、緊張を内在させていると思われる。母親が“～しなさい”というのに対し、“んんん！”と抵抗している状態である。鬱積したエネルギーの発散をはかり、母親からの分離を促進する目的で遊戯療法を行なう。母親に対しては子どもとの関係を考えることや家族関係の調整をす

ることを目的としてカウンセリングを行なう。H夫担当は筆者、母親担当は元名女大助教授弘中正美先生である。

5) 面接の経過；インテーク（6月4日）より第37回面接（翌年9月1日）までを5期に分け、経過を記述する。

第I期 インテーク（6/14）～#4（7/9）

H夫は小柄で幼い感じではあるが、色黒のいたずらっ子という印象もある子どもである。緊張が強くて、インテーク時には部屋の真中に突っ立ったまま、20分間程動かない。スローペースでいかにもエネルギーの乏しい感じであり、新しいことを始めるには、セラピスト（以下thと記す）のことが必要である。徐々に部屋の玩具を試し始め、動作のペースも早くなる。箱庭で内的な表現をする一方、パチンコをものすごい勢いで連打し、指先を使つてのエネルギーの放出という印象を受ける。

#1の箱庭作品①（図1）では、左半分下方を使い動物を置く。淋しい作品ではあるが、ゴリラやライオンなどの猛獣も含めた動物が使われていて、潜在的な力は持っていると感じられた。箱庭②（図2）は箱の使用が全体に広がり、先回と同様の動物に子どもの動物やピストルを持った人間が加えられる。木がほぼ中央に置かれて力強さも出てくる。最後に大きなロボットが置かれる。このロボットは以後毎回のように使用され、H夫にとって意味のあるおもちゃとなってくる。#3には砂山を作り、怪獣とロボット、ウルトラマンを対決させるように置く。大ロボットを向かい合わせに置いて、玉を発射させる。（図3）すさまじい戦いの様相であるが、敵味方は判然とせず、混沌とした印象である。箱庭③（図4）も同様のテーマであるがよりどころとなる木が左すみに出てくる。

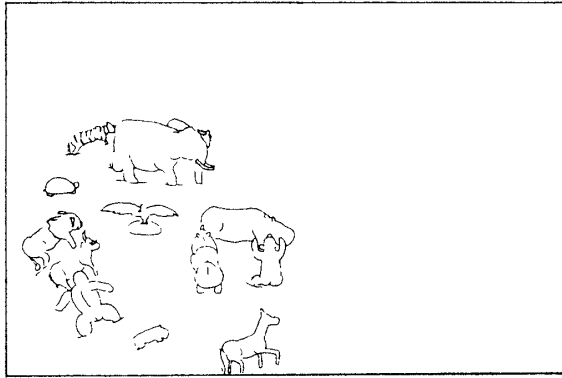


図1 箱庭①

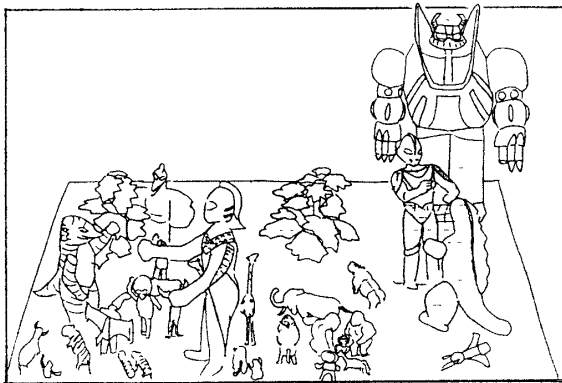


図2 箱庭②

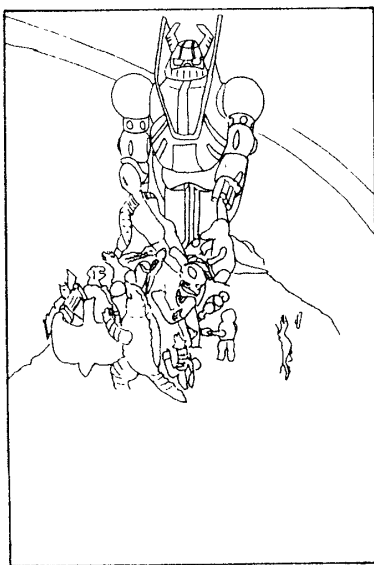


図3 砂山①

第Ⅱ期 #5（7/16）～#9（9/17）

部屋が小プレイルームに変更になる。モグラ叩きを勢いよく叩きつけ、パチンコと同様、指先を使つてのエネルギーの放出という印象である。刀を使って th との関係もつき始める。最初はこわごわ th の刀を叩くが、慣れるにつれて、ナイロンの刀がぐにゃぐにゃに折れる程に叩きつけてくる。

#6の箱庭④は乗物や戦闘機、ウルトラマン、怪獣が秩序なく置かれるが、最後に全体を見通す位置に“オタスケマン”が登場してほっとさせられる。#8、#9の箱庭⑤、⑥は白砂にはほぼ同様の素材を使って作られる。箱庭⑤の方は手前半分を使い、動物や戦闘機、ウルトラマンなどが置かれるが、電車や自動車の上に橋を置いたり、ウルトラマンを倒して自動車の上にかぶせるなど混沌とした印象である。いかにも整理のつかないH夫の心を垣間見るようである。最後に真剣な顔つきになり、黙々と砂をかけていく。箱庭⑥は全体が使われ中央に木が出てくる。手で道を描いたり、自動車を走らせるなど、エネルギーのはけ口も少しずつ見つかっているかと思われる。

この頃、母親に向って“うるさいなあ”と大きな声でいったり、乱暴な口をきくようになる。

第Ⅲ期 #10（10/8）～#19（12/17）

この回から再び大プレイルームに戻る。キックパンチを使って、激しい攻撃性の表出がなされる。キックパンチを背負い投げし、その上に飛び乗ったり、足でけつたりの行動に th は参加することも困難になり、“H君、投げました”と実況放送の趣きでH夫の行動を言語化していく。#12には最高潮に達し、30分間程続ける。この回、カブスカウトからのハイキングを嫌がったが、“行きなさい”といったとたんに、声を出すチックが出たことや、帰ってからお腹をびくびくさせる動作が出たことが母親より報告される。

この後、th を相手の運動プレイに移る。ボール投げ、バッティングマシーンなど、汗びっしょりになって動きまわる。相変らず強いエネルギーを出す。強いボールは th をはずし、壁にあてるなどコントロールもするようになる。#14の箱庭⑦（図5）では、大ロボットをほぼ中央に置き、手の武器を噴射する。相対する形でウルトラマンを置き、ほっとした様子で、トランポリンに腰を下す。#18ではH夫と th が向い合つて砂山を掘り、4つの穴が通じる。大ロボットを山の頂上に立て、ロボットとウルトラマンを向かい合わせに置く。（図6）攻められているのは大ロボットであることがはっきりしてくる。

第Ⅳ期 #20（翌年1/28）～#26（3/24）

th を相手にして攻撃性が出されるようになる。すべり台をかけ降りたり、昇ったりして、遠慮なく刀で th に切りつける。“ヤッ”と声を出しながら、死んだ真似をしている th のお墓の中にまで入ってきてやっつける。一方、H夫は刀やピストルなど多くの武器を持ち、洗面器

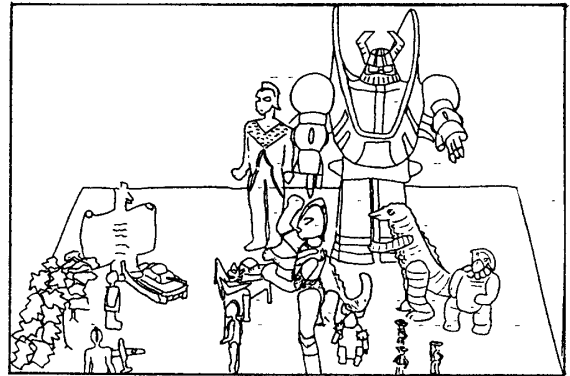


図4 箱庭③

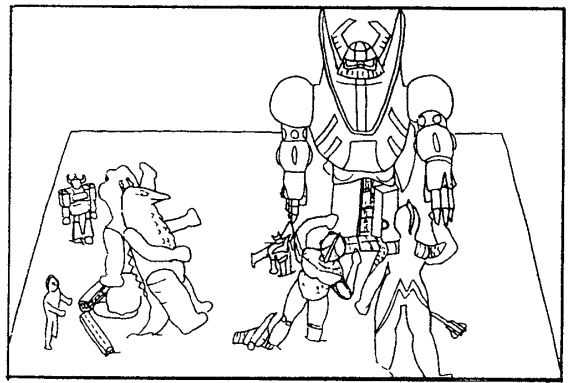


図5 箱庭⑦

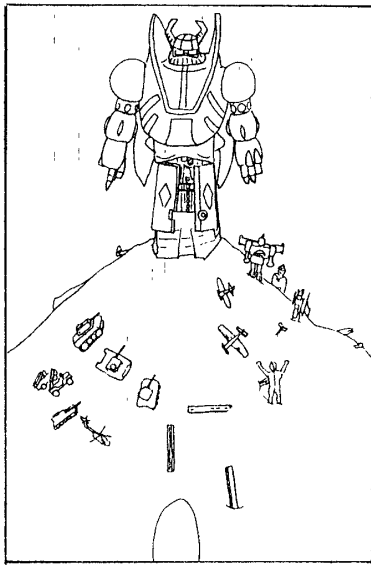


図6 砂山②

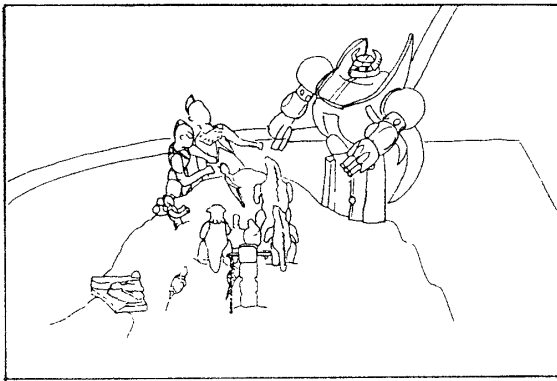


図7 砂山③

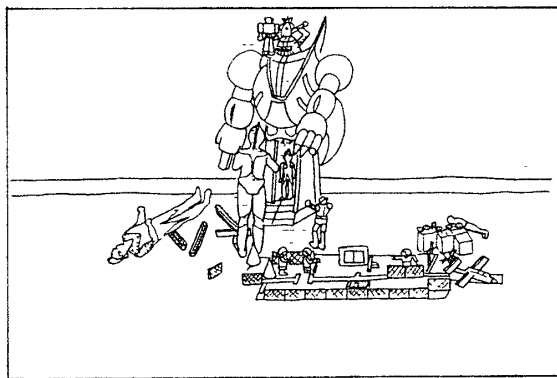


図8 窓際

を顔にあてて防御している。これ程までにして身を守らねばならないH夫の弱さを感じさせられる。母親からは“反抗が激しくて、扱いにくい”と報告される。

落ち着きなく動き回るが、砂遊びには没頭する。水が使われるようになり。#23には山を作り、H夫が洗面器に砂、thが水を入れ、“ヨーイスタート”で頂上からかけ合う。#25にはレゴで家を作り、次の#26にはその家を倍に広げる。家の側で大ロボットと怪獣、ウルトラマンの戦いがくり広げられる。(図8) H夫は自ら怪獣やウルトラマンを手にして、大ロボットをやっつけに向かっていく。

第V期 #27 (4/7) ~ #37 (9/1)

#27には大ロボットを頭の角だけ残して、すっかり埋め込む。(図9) 掘り出してからていねいに砂を払い、

大ロボットへの攻撃と愛着のアンビバレンスが示される。同じ回の箱庭⑧にははじめて家や花が登場する。(図10) しかし、門には二重の柵がおかれ、防御の固さがうかがわれるし、家の中にも武器や戦車が入り込み、家が安らぎの場にはなり得ないことが示される。#29の箱庭⑨では初回に使われた動物が登場するが、強い動物はおりに入れられる。(図11) 自分でも取り扱いようのなかった衝動性が、一応おさめられたようである。大ロボットについては“置いてあるだけ、飾ってある”という。この頃、“カブを休んで友達と遠くの公園へ出かけたこと”や、“家族との遠出を断わり、友達と公園へ行く約束をしたこと”が報告される。

#32では窓際にミルクビンや怪獣、ウルトラマンなどの的になるものを置き、水鉄砲で倒していく。大ロボットのお腹に水を入れる。砂場に立たせ、上から砂をかける。次にスポンジでふきとり、窓際に戻す。いかにも大切なものを扱っている感じである。H夫の表情が何かがふっきたように明るくなる。箱庭

では戦いのテーマがはっきりし出し、thとの間では将棋が始まる。家庭においても父親を相手に将棋をしているとの報告がされる。母親の支配から抜け出したものの、自律の力がついていなかったり、自分からは友達の中に入っていけないなどいくつかの問題は残っているが、チックの症状も消え、家庭の問題も一段落した時点で終結になる。

事例2 K子 小5女児

1) 主訴；学校に行けない。

2) 家族；父－40歳，母－39歳，共に自営業．姉－14歳．K子－11歳．

3) 生育歴及び症状の経過；乳幼児期は身体が弱く，年中病院通いをしたが，病気以外のことでは手のかからない子どもだった．母親が店の仕事で多忙だった上，姉が発達障害のため手がかかった．K子は一人で放っておかれることが多く，不規則な生活になっていた．小1の2学期，郊外のN町の小学校に転校，先生に叱られて夜驚をおこす．学校は大好きで，勉強もよく出来，クラスの委員などをやっていた．小5になり，男性の担任になる．父母間でも評判の厳しい先生であり，K子は友達が叱られているのを見るだけで気分が悪くなった．4月8日から嘔吐が始まり，10日に1度位の割合で3回嘔吐し，欠席する．学校は行きたいが，身体がついていかずに行けない状態である．その他食欲不振・不眠などの身体症状や，不安が強い，笑いがなくなり無表情になるなどの鬱的な症状も出している．姉が受診していた病院から当相談室を紹介され来談する．

4) 診断仮説；K子は乳幼児期から種々の事情により，母性的養育を十分に受けられなかったが，本来的に持っている力でむしろ‘いい子’として適応してきた．しかし，思春期の入口にさしかかった時点で，男性の先生と出会い，今までの防衛が崩れたと考えられる．父親が姉の方を可愛いがり，K子には厳しく接していたのである．K子にとって担任と父親の怖さが重なり，発症に至っている．K子は表面的には父親への不満を強くもち，父親との関係を作っていこうとしたのだが，その作業を支えるために母親の愛情を確認する必要があった．親の愛情をめぐる姉妹葛藤があったわけであるが，知的には姉のハンディを理解出来るK子にとって，葛藤はより強くなり，身体症状としてあらわれていたと考えられる．K子が深いレベルでの母性を体験し，葛藤の言語化が出来ることを目指して遊戯療法を行なう．母親に対しては，夫婦関係のたて直しと家族関係の調整を目標にカウンセリングを行なう．担当は事例1と同様にK子が筆者，母親が弘中先生である．

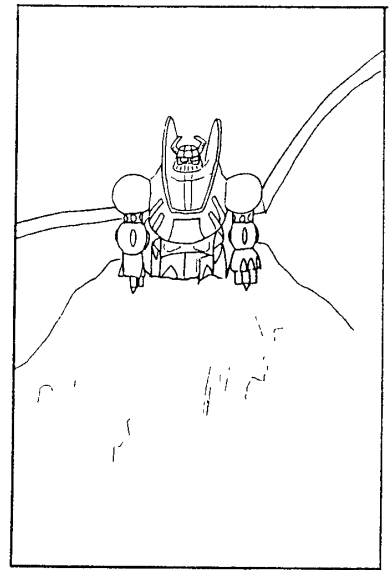


図9 砂山④

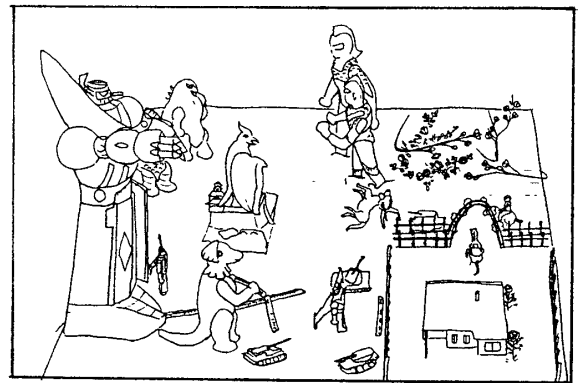


図10 箱庭⑧

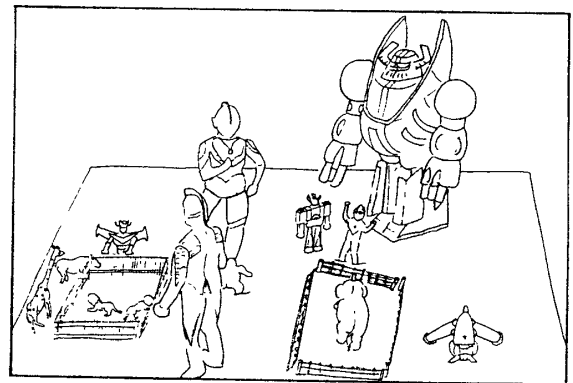


図11 箱庭⑨

5) 面接の経過；インテーク面接（5月13日）の後、身体症状を起し入院したため、2回は母親のみの面接となる。筆者が担当した6月8日の面接を第1回とし、計25回を4期に分けて記述する。

第Ⅰ期 #1（6／8）～#5（6／15）

K子の印象は、子ども時代を終え、思春期を迎えるに至らない、まさに移行期にある‘少女’という表現がぴったりである。利発で明るい感じだが、繊細さをも備えていて、緊張も強い。

心理療法の適用の面からも、無邪気に遊ぶだけの時期ではなく、本格的なカウンセリングには早すぎるという狭間の時期である。K子は遊びながらおしゃべりをし、描画や箱庭を使って、自己表現をしていった。

#1から#3までは、砂場での遊びが中心になる。#2では砂山の上の街を“地震”とって倒す。#3では砂場に“原始林の猿”を作った後、水場に移り、ビニールプールの中に水を入れて、おもちゃを置いていく。“竜宮城”，“ホッツエンプロツェルと大どろぼう”と名づける。プールのふちに沿って建物が並べられ、中央に蛇を踏みつけている女神像や人魚姫が置かれる。天使の人形を“嵐”とって沈めたり、わにの口に金魚をはさんだり、不穏な様相が出てくる。初期のプレイにはK子のゆらぎの気持が示され、退行の方向に進んでいることも感じられる。

#4にはブルーの大型紙に手型を取り、描画にうつる。“げんげにする”，“川が流れている”とイメージがふくらむにつれて、母親と姉3人で過ごしたN町が思い出されたくて、おしゃべりになる。N町は母親が療養のために仕事を休み、ゆっくりと過した場所である。“2年の時、1年間だけど、長い時間みたいな気がする”といい、N町がK子にとって大切な場所となっていることが分かる。“学校から帰ったら、ジュースとお菓子を持ってげんげ畑に行った”と、思い出を楽しそうに語る。“ここ（相談室のある場所）がN町に似ている。はじめて来た時、N町かと思った”ともいい、相談室が‘癒しの場’としての意味をもつことも思う。次の#5ではハーモニカでユーモレスクをふき、“N町の学校でお帰りの時やっていた。レコードを買った。お母さんも好き”といい‘よき時間’がK子の心によみがえっているのが感じられる。

おしゃべりの中では姉のことが主な話題になる。#5には夢が報告され、“お姉ちゃんは夢といっても分からないみたい、だけどみるんだろうね”といい、“人間だもんね”とつけ加えたのが印象的だった。夢は“お母さんがお姉ちゃんにだけ本を買ってあげて、私には買ってくれない。ずるいといっていた”というものであり、“ほんとに涙が出ていた。何にもないのにね”という。thは姉と母親の愛を取り合っている切ない夢として聞く。K子にとって、姉の障害をどう受けとめていくかが課題となってきたいるが、親の愛情をめぐる姉妹葛藤をはらむだけに困難さもひとしおである。

第Ⅱ期 #6（7／13）～#10（9／14）

この時期、死の問題がK子の心に去来しているような発言が出てくる。#9の面接時に、“私が死んだらお母さんは？”，“一緒に死ぬ”。“お姉ちゃんが死んだら？”，“一緒に死ぬ”という会話をくり返しているという報告がある。#6、箱庭に部屋を作りながらおしゃべりをする。“黒猫がいたけど交通事故で死んだ。その前の猫も死んだ。魚も死んだ、いんこも死んだ。動物が育たない”という。#8にはブロックで家を作りながら“うちの家は動物が育たない家。鳥も死んだし、猫は一匹はテンパーで、一匹は交通事故で死んだ。犬の死ぬ夢もみた。坂になった屋根の上をずっと落ちていって死んだ”と話す。続いて“今日もこわいを夢みた”と報告される。“追いかけてる夢。自分と似てなかったけど自分。大きくなってからみたいだった。

追いかけてるのは誰か分からない。どこかの家に逃げ込んだ。追いつかれたけど大丈夫だった。”わけの分からないものに追われる不安夢は思春期の特徴を示している。面接室に逃げ込んできたのかもしれない。

この頃、おしゃべりの量は多くなり、姉への思いや両親のきょうだいのことなども話し出す。#6には学校に行けなくなった頃の経験が少しおずおずとした感じで話し出される。“4月のはじめはよかったけど、2、3日して教室でこわくなった。他の子が怒られていてもこわかった”。

その後の夏休みはぐずぐずと母親に愚痴をいったり、“私をこんなに育てたのはあんたのせい”と責めることが出てくる。今までのK子にはなかったことである。気分のすぐれない日を過していたようだが、8月末に“ピーターパン”の劇を見て感激する。この劇はK子の心に触れる所があったようで“どうしても”ともう一度見に行っている。気分の方も少し持ち直して新学期を迎える。

#10にはプラレールを見つけて、生き生きと作り始める。部屋いっぱいレールをつなげて、箱庭のおもちゃも使い、駅、村などを配置する。列車を走らせる。坂道は手助けして走らせるので、“ちょっと助けてあげるといいね”とことばをかけながら、thには現在のK子のイメージと重なってくる。うつうつとしていた気持ちにも少し区切りがついたかとも感じられる。

第Ⅲ期 #11（9/12）～#14（10/12）

K子はがんばって登校を始めるが、風邪様の身体症状が出て、すっきりしないことが多い。遊戯室では手なぐさみの遊びをしながら、おしゃべりすることが多くなる。#11には“うち、猫を飼った。捨てられていたかわいそうな猫”というので、“今度は育つといいね”と話し合う。担任への批判や不満もはっきりと言語化し“死んでしまえばいい”とアグレッションを向けるようになる。K子の中で次第に強い力が育っていると感じられる。#13には“こわい夢をひとつ、何度も見る”と夢が報告される。“小さな男の子がいてうずくまっている。顔をかくしているので誰か分からない。白とピンクの布みたいなのがあってこわい。何といたらいいか分からないけどこわい”という。“お父さんは‘水子’といった”ともいい、親の問題にまきこまれていることをうかがわせる。こわい話の続きとして#14には“幼稚園の時、眼がさめたらお父さんもお母さんもいなかった”と見捨てられ不安を言語化する。また“おばあちゃんが手伝いにきてすごくこわかった。便所に閉じこめられたりした”と祖母の怖さも話される。“お父さんはおばあちゃんに差別された云々”と、父親を生育史との関連で理解出来るようになり、関係は修復されてくる。

第Ⅳ期 #15（10/19）～#25（翌年5/10）

黒板に絵をかいたり、折り紙をしたりしながら、友人関係や先生のことなど現実的な話題のおしゃべりが多くなる。この頃、家庭においては両親がぶつかり合いを始めており、K子も父母の生い立ちや両親の関係に言及することもでてくる。夫婦げんかの度に吐くなど、まきこまれてしまう。

母親の面接では母子間の適切な距離について話されている。K子の発症によって、母親は神経を遣い、K子の言動に注意してきたため、K子は煩わしくなり“お母さんはいつも私のことを見ている”という。母親は“神経を使うのをやめ、気楽にすることにした”と、もう一度自然な関係を取り戻そうとする。家族の再構成が少しずつ進み出したのを反映してか、#20、K子は豆電球をおもちゃの家に入れ、部屋を次々に明るくしていくという遊びをする。

学校の行事には積極的に参加し出し、“最後にせりふの役をやろうと思った”と、自分から

役の希望を出したりもする。#17には“N町はいいけど、今の所でもいいと思ってる”と、現在の生活に落ち着きを見せ始める。#22には“一度かきたいと思っていたものをかこう”と、女の子三人が空を飛んでいる様子を淡い色調でかく。“何か分らないけど妖精みたいな感じ”といい、‘ピーターパン’の‘ウェンディ’を思わせる絵である。#18には“歯がぬけたこと”，#20には“早く大人になりたい”と将来の夢を語るなど、‘大人になっていくこと’のテーマもK子の中で動き出している。#24には7cm角の画用紙のカードに絵をかく。“ヘンゼルとグレーテルの話の筋をかえた。森に迷ったら家が見つかった。ドアをあけるとお父さんとお母さんが出てきた”。(図12～15) 10ヶ月間にわたる心理療法を見事に要約したと思える絵である。

3学期になりほとんど休みなく登校出来るようになり。また行事に参加するため来室が困難になったこともあり、6年生の5月10日が最後の面接になる。トランポリンをとんだり、おもちゃをいじったりしながら“6年生になって先生が変わったこと”，“生理のこと”，“父親と祖母の関係”などを話題にする。その後“これが一番気に入った”と井戸のおもちゃを取り上げ、箱庭を作る。木に囲まれた井戸のそばに、バケツを下げた女の子が立っている場面である。K子はこれから女性としてのいのちの水を汲み上げる仕事をしていくのであろう。黑板に女の子の絵をかいて終了する。その後の母親の報告では“自分からいいたいことをいえるようになった。私は行かない。もう直ったから”といったそうである。

考 察

1. 学童期の位置づけ

フロイト (Freud, S.) はこの時期を潜伏期とよび、エディプス期に活撓だった幼児性欲が沈静化し、思春期において再び性欲動が始動するまでの比較的安定した時期としている。また、人間の発達を八つの段階に分けた

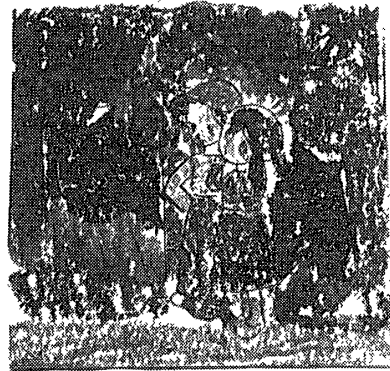


図 12



図 13

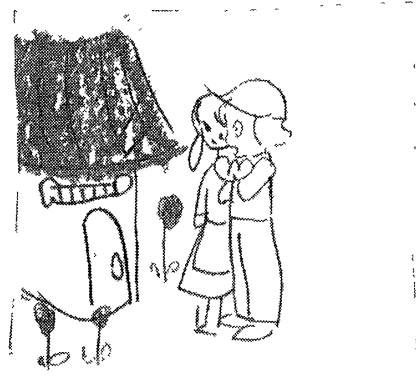


図 14

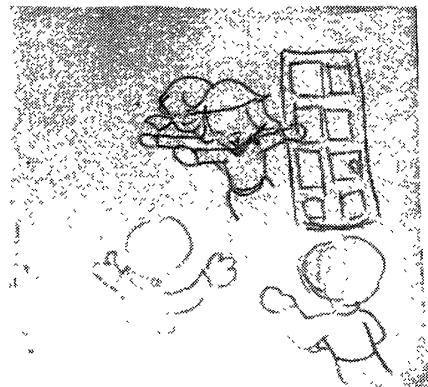


図 15

エリクソン（Erikson, E. H.）は学童期を第Ⅳ段階として位置づけ、‘劣等感を克服して勤勉性を身につけること’をこの時期の課題としている。子ども達は主に学校教育において、真理を学び、技能を身につけることを学び始める。しかも、仲間と共に、仲間の中においてである。この課題を自分のものにする時、子どもは‘自分は仲間と共にやっていける力がある’という‘有能感’を自分のものとする事が出来る。失敗した時には劣等感にとらえられ、仲間集団に入っていけなくなってしまう。そういう意味では、学童期は社会に足場を作るための基礎作りの時期といえよう。

いずれの時期においても、前の発達段階で身につけた力が基礎になってくる。有能感を身につけ仲間集団に入っていくためには、乳幼児期を通じて培われてきた人格的な強さの如何が問われるのである。すなわち乳児期において作られる基本的信頼感によってこの世に生きていく希望を得、しつけを通して身につく自律の力、遊びを通して得られる自主性があってはじめて可能になってくることである。さらにまた、学童期における仲間集団への根つきは、次の思春期のゆらぎを乗り越える土台となっていくであろう。このように、発達を単にその段階に閉じこめることなく、生涯発達の視点でながめてみると、どの段階もそれぞれの重要性を持ち、ひとつひとつの発達課題を着実にこなしていくことが精神的健康につながっていくこともみえてくる。生涯発達をみすえた発達の理論がでてくるにつれて、“人生移行”の概念が提出されてきている¹⁰⁾。人生移行とは‘生まれてから死に至るまでの移りゆき’のことであり、移行期は“危機を内包している”。学童期の前半においては、幼児期からの移行をどのように遂行していくか、後半においては、思春期への移行をいかに果していくかの問題であり、つまずきが出ることも多い。それぞれの事例について母子関係の観点から考察を加える。

2. 親から仲間関係へ —— 事例1 から ——

前思春期における友人関係の重要性に注目し、同性との親密な交わりが人格発達に及ぼす影響について述べたのはサリヴァン（Sullivan, H. S.）である。サリヴァンの考えに依拠しつつ、藤田は症例研究を通して人格発達における前思春期の意義を次のように述べている¹¹⁾。すなわち、思春期は異性の出現という事態に直面し、性欲という身体の次元の欲求と親密さという精神の次元の欲求とを総合的に充足させることが一つの課題になってくる。また、思春期においては親からの分離が促されるとともに、仲間との一体性が壊れて、集団が細分化され、各人の個別化も進んでいく。このような状況をのり切るためには、共同性の基盤にしっかりと根付き、共感性が発達していることが必要である。この共同性や共感性の発達に寄付するのが学童期における仲間集団である。思春期や青年期でのつまずきが、学童期における仲間集団への参加の失敗に端を発していることは、臨床的にも観察される事実である。

前項で述べたように、仲間集団に入るためには、乳児期からはぐくまれてきた人格的強さが基礎になるのであり、親の側がいかに子どもを離していくかという問題にもなってくる。

H夫は乳児期早くから保育園にあづけられ、しかも、おそらく妹の誕生で不安定になっていたと思われる頃に転園している。‘世話のかからない’子ども故に、親の手をわずらわすことなくすごしてきたであろう。その頃、夫婦間の問題のため、いさかいが多く、H夫は部屋のすみでしょんぼりしていたともいわれる。このような情報から推察すると、安定した母子関係に支えられた落ちついた乳幼児期ではなかったと思われる。一方、母親の方は子どもを自分の思いのままにしようとする傾向が強くて、カウンセラーの表現によると“真綿で首をしめるようなやり方”で子どもに接していた。H夫は母親に甘えることも反抗することも出来ずに、本来的には強い活動性や衝動性を鬱積させていたと考えられる。家族全体を見ても、外出時や寝る時

にはいつもH夫と母親、妹と父親の組み合わせになるということだった。森谷はチックについて“患児と母親がまさしく身体的に未分化な癒合的關係にあること、さらに患児がもはやその状態に耐えることが出来ないこと、自分自身の‘息吹き’を母親とは別のところに求めなければ窒息してしまうことを訴えている”⁵⁾としている。H夫もまさしくこのような状態でチックの症状を選択したのだろう。母親と分離し、自分自身の‘息吹き’を回復していくことがH夫の遊戯療法の目的であった。

H夫の‘独立戦争’は箱庭と砂場を使ってくり広げられる。インテーク時のH夫は運動抑制ともいえる状態にあり、自発的な動きが全くとれない。箱庭も左隅だけが使われるが、ライオンやゴリラも含めた野生の動物が置かれていることや、強い緊張を保っている様子から逆に、力強いエネルギーを内包していることも感じさせられた。子どもの攻撃性や衝動性は親からの規制が‘守り’になって、その枠組の中で安心して表出されていくものである。しつけを通して、子どもは自分の欲望や衝動をコントロールすることを覚えていく。またしつけの中での親とのぶつかり合いを通して、子どもは自分を表現することで他と衝突することを知り、適切な自己表現の方途をも身につけていく。それがつかめていないH夫は自分の気持ちを表現すれば暴走してしまう不安にかられ、仲間関係に入っていけなかったであろう。

第2回で置かれた大ロボットは、手のボタンを押すと武器がとび出し、お腹の部分には小さなロボットが入っている。この小ロボットは大ロボットのお腹に戻り、力を蓄えて外に出て行くという仕かけである。この大ロボットは高さ40cm位もあり、砂箱や他のおもちゃに比して不釣り合いに大きなものであったが、H夫は自分の気持ちを表現していくのにぴったりのおもちゃを選んでいる。怪獣とロボット、動物達のたたかいは混沌としていて、敵味方も定かではない。鬱積する怒りをどこに向けていいかわからないH夫の心の状態がよくあらわれている。特に小プレイルームで作られた箱庭は、乗物、ウルトラマンなどが無秩序におかれ、混沌とした様相を呈する。見ても落ち着かない気持ちにさせられるが、オタスケマンの登場や、道がかかれたこと、中央に木が置かれたことで何とか見通しがもてるようになる。この間、プレイルームでの動きは次第に自由、活潑になり、はじめはパチンコやモグラ叩きを使っただけの指先でのエネルギー放出であったのが、キックパンチ相手に全身を使っただけの発散となる。これまで貯えこんでいたエネルギーを投げ出すという感じのものすごい勢いであった。ただ、この頃までは自分一人での放出であり、他者であるセラピストとの関係においてではない。大あばれの後、第14回では大ロボットにはっきり相対する形でウルトラマンを置く。ようやく攻撃対象が明確になってきた印象である。セラピスト相手の遊びも出てきて、激しい攻撃性に向けると同時に、退行の様相もみせてくる。母親に対しても反抗が激しくなる一方で、“寝る時には妹と母親をとり合う”ような甘えも出すようになる。第24回の砂山での戦いでは、攻める方と攻められる方がはっきりしてくる。さらに第26回、レゴの家のそばでくり広げられた戦いでは、ウルトラマンなどを手にして、直接に大ロボットを攻撃に行く。ようやく直接に向い合っていく力が出てきたということであろう。次の第27回では砂山の頂点に君臨する大ロボットに向って、ウルトラマンやロボットがたたかいをいどみ、最後にロボットはすっかり砂の中に埋め込まれる。掘り出してからでいいのに砂を払う様子からは、大ロボットへの愛着がみてとれるのである。大ロボットは愛憎のアンビバレンスが向けられる存在であり、一度抹殺した後はむしろ愛情の面が出てきたのであろう。同じ回の箱庭にははじめて家や花が登場する。しかし、家の中にまでたたかいが入りこんできており、門を二重にして自分を守らなければならない。H夫の成長のためのたたかいは容易ならざることを感じさせられるのである。現実の生活においては、こ

の頃友達との遠出が出来るようになり、親から友達への移行が少しずつなされてきている。

第32回では水鉄砲で大ロボットを直接に攻撃していき、その後ていねいにスポンジでみがくようにする。攻撃の対象はまた愛情を向ける対象でもあり、この葛藤を統合していくためのH夫の苦闘である。仲間への所属感がH夫を支えるのであるが、父親の世界への近づきも母親からの分離を助けていく。遊戯室でセラピストを相手に将棋を始めた頃、家庭でも父親相手の将棋が始まっている。ここでゲームを介して他者と向き合い、対等にたたかっていく段階に達したと考えられる。H夫は安全な遊戯室でセラピストに守られながら、自分の気持ちを表現する経験を重ね、母親に甘えと攻撃の両面的感情を向けていった。べったりとくっついたり、逆に“お前！”呼ばわりの激しい感情が示されるが、母親はカウンセラーに支えられて、H夫の気持ちを受け止めていく。何度かのぶつかり合いを通して、H夫と母親の関係は調整され、H夫は安心して男の子の仲間に入っていけるようになる。

3. 前思春期のあやうさ —— 事例2から ——

子ども時代を終え、思春期に入るまでの前思春期のあやうさについては、臨床的に注目されてきている。特に女の子が初潮を迎える予感をはらんだ一時期、それまで不問に付されてきた生育史上の問題が顕現してきて、K子のような‘いい子’の不登校としてあらわれてくることも多い。問題解決のためには、本人のみではなく、家族全体の力動的変化が必要になることもある。第二性徴によって身体的にも母親となる準備が始まる女の子にとっては、本格的な親との分離個体化の前にもう一度、母性にふれる体験をし、安定した基盤の確認がなされねばならない。

K子の事例について、弘中は母親面接の経過から“母性の犠牲とその取り戻し”³⁾のテーマがあるとしている。母親は柔和で落ち着いた印象の人であり、生育史やきょうだい関係の情報からしても、もともと母性を持ち合わせていた人であると思われる。K子も“好きなのはG市のおばあちゃんの所（母方祖母宅）。ゆったりしている”という。一方の夫は家族に対して“無責任で非協力的”であったということから、子どもの問題だけではなく、仕事上の責任も母親の肩にかかってきていた。もっとも夫の方もその母親からきょうだい間での差別をうけ、愛情をかけられなかったという生育史をもっている。同じように母性の犠牲と考えられるのである。夫の方の問題はともかくとして、元来がんばり屋で芯の強い母親は自分に課せられた役割をこなそうとして、ゆとりをなくし、自然な母性を切り捨ててしまっている。K子が“動物が育たない家”といったように、家庭の中に‘育くむ力’が欠落してしまったのであろう。K子の発症をきっかけとして、母親は自分の在り方に気づき、夫とも離婚を覚悟してぶつかっていく。カウンセリングをうけた結果、“何もしないでいる時間を持つことを楽しみ、家族の一人一人を見守る充足感を味わう”ようになり、“家庭の中の女の人の重要性”を語っていく。K子が最終回の箱庭でおいた‘女の人と井戸’に相通じるものであろう。

‘母性の犠牲とその取り戻し’はK子の方にも併行して起ってきている。K子は相談室に来始めて、N町のことを思い出す。母親が仕事を休み、‘母親として’居ることの出来た場所である。K子は次第に退行を始め、それまでいわずにいた不満や甘えを母親にぶつけていくようになる。今まで押えこまれていた“姉と比較して……”の思いは親の愛を疑うことになり、K子には地盤のゆらぎとして経験される。鬱状態に陥ったK子の救いになったのは“ピーターパン”の劇である。K子はこの劇を“10回でも見たい”といったそうであるが、何がそんなにK子の心に触れたのか、何年来かの宿題を果たすべく、筆者も“ピーターパン”を見る機会を持った。生き生きと躍動するピーターパンは確かに魅力的であり、K子のエネルギーを取り戻させるに充

分であったと思われたが、にぎやかさの陰に見えかくれする淋しさや切なさも見のがせない所である。親からの適切な愛情を受けられなかったために、いつまでも‘母さん’を捜してさまよう切なさである。成熟を拒否していつまでも若さにとどまろうとする点が‘大人になりたくない症候群’（ピーターパンシンドローム）としてとらえられている¹⁾。しかし、K子には大人になりたくないというよりは親を捜してさまよう心情の方がびったりときたであろう。一方、ピーターパンの相手役のウェンディは、ピーターパンやないない島の子どもの達の‘代理母さん’をつとめる。K子はこのウェンディにも同一視したのではないだろうか。すなわちピーターパンのように母性を与えられるのを求めると同時に、どこかで与える存在への転換がおこったのではないかと思う。K子はむしろ“早く大人になりたい”といい、大人になることの夢を語っている。子どもから大人になることは、女の子にとっては母性を備えた存在になっていくことを意味している。K子は今まで与えられなかった母性を求めて、母親をゆさぶる一方で、今度は自分自身が与えていく存在になる契機をどこかでつかんだのではないか。執拗に求めるばかりでは、いつまでも充足感は得られない。自分が与え、受けいれることが出来ると感じることは成長へのきっかけとなってくる。K子は父親にも不満をぶつける一方で、理解しようとする動きもみせる。そして母親によって差別された生育史を知って、父親を受けいれていく。幼い子どもなりの許しと受容の動きが出てきている。したがってK子にとって‘母性の取り戻し’とは、母親から母性を与えられると同時に、自分自身の中に母性の萌芽をみることであったと考えられる。

男児は最初から母親とは全く異なる存在として、母親と分離し、対決していくことで、男性としての成長をとげていく。しかし、女兒にとっての母親との関係は、対立ではなく、分離しつつ、母親の元に戻り、自らのうちに母性を育てていくという円環的なものである。したがって、現実の生活においても心理療法の場においても、具体的な行動レベルで母親的な世話をうけるだけではなく、それを‘体験’して自らの心のうちに貯えていかなければならない。

お わ り に

学童期前期の事例として、チックの男児をとり上げ、母親からの独立戦争と解釈しうる遊戯療法の経過を示した。現実の生活においても、母親への甘えと攻撃を表現しながら、次第に仲間関係に入っていくようになる。学童期後期の事例は身体症状のため登校出来なくなった女兒を取り上げ、‘母性の犠牲とその取り戻し’の観点から考察を加えた。母親から母性を与えられると同時に、自らが母性を持つ存在へと転換することが女兒に特有な成長と考えられる。いずれにしても母子関係を支えるものとしての父親の役割も重要になってくる。心理療法において母子関係の改善を目指す時にも、常に家族全体の動きを視野に入れておかねばならない。

付 記

図1～11は写真をもとにして、教育研究所研究員の金子和加子さんがスケッチして下さいました。ここに記して感謝致します。

文 献

- 1) 藤田早苗；前思春期の心性。河合隼雄他編 精神の科学6 ライフサイクル。岩波書店，1983。
- 2) 東山紘久；児童期。小川捷之他編 臨床心理学大系3 ライフサイクル。金子書房，1990。
- 3) 弘中正美；ピーターパンの母親捜し ―ある登校拒否女兒の母親面接過程―。心理臨床ケース研究6。誠信書房，4-22。1988。

心理療法過程における母子関係の変化（2）

- 4) Kiley, D.; The Peter Pan Syndrome. 1983. 小此木啓吾訳；ピーターパン・シンドローム. 詳伝社, 1984.
- 5) 森谷寛之；チックの心理療法. 金剛出版, 1990.
- 6) 中沢たえ子；子どもの心の臨床. 岩崎学術出版, 1992.
- 7) Newman, B. M. & P. R. ; Development Through Life. 1975. 福富 護訳；生涯発達心理学. 川島書店, 1988.
- 8) 杉山登志郎；児童期の心身症. 若林慎一郎編 児童期の精神科臨床. 金剛出版, 1983.
- 9) 牛島定信；思春期の対象関係論. 金剛出版, 1988.
- 10) 山本多喜二・S, ワップナー編著；人生移行の発達心理学. 北大路書房, 1991.